

個人的経験としての自然災害

—— モンゴル牧民社会の事例 ——

尾 崎 孝 宏

● はじめに

近年、モンゴル国では自然災害が対外的にも大きなトピックとして取り上げられることが顕著である。その中でも雪害（ゾド）は日本国外務省のホームページでも「最近のモンゴル情勢」として言及され、またそれに対して国際的な支援活動が展開されるなど、国家レベルでの関心を引く出来事として発生している⁽¹⁾。

しかし、ここで考えるべきことは、モンゴルで雪害・干ばつ（ガン）・風害（ショールガ）と呼ばれる自然災害は、その要因となっていると考えられる大雪・少雨・大風といった自然現象とは事象のレベルが異なる点である。後者は、必ずしも人間の存在を必要としない気象という現象のうち、平年値を一定限度以上逸脱したものをカテゴライズした概念であり、その意味において自然科学的な事象であるといえる。それに対し、前者は後者を原因として発生するとはいえ、「家畜の被害頭数」や生産手段としての「草原への被害面積」あるいは「被災者」の避難行動など、人間活動へのマイナスと考えられる影響が一定以上に達したものをカテゴライズした概念であり、その意味において人文社会科学的な事象である。つまり、ある種の自然現象が、人間との関わりの中で自然災害として経験されるというプロセスが存在するのである。

そして、この「経験」も、様々なレベルが存在しうることが想像される。例えば、上述の日本国外務省の言説はモンゴル国政府のそれと対応したものであるが、ここでのフォーカスは経済損失あり、おそらくこれに呼応する行動として後述の事例16に見られるような国際援助が続くものと想像される。これは国

家的経験としてのゾドと呼びうるものであるが、これとは別に、極めてミクロな視点へ移動すれば個人的経験、あるいは個人の所属する最小の社会的単位としての世帯レベルでの経験としてのゾドが想起可能である。当然ながら、国家の発表する総数としての被害頭数や面的広がりとしての被災地域は地方からの報告の集成によって導かれたものである。その意味において、より原初的な経験は個々の牧民や牧畜経営単位としての世帯のものであるといえよう。また、国家への災害報告の単位となっているのは最小行政単位であるソムのレベルであり、これは牧民にとっても有意な地域社会の範囲となっている。ゾドは被災者の避難や救済措置、また今後の対策などという形で既存の地域社会のあり方に対して何らかのインパクトを与えるであろう。すなわち、地域社会の経験としてのゾドもまた別個のものとして存在するものと想定しうる。

上述の自然災害に関わる3レベルの経験は作業仮説としての想定ではあるが、その中で個人的経験としての自然災害は、これをベースにして広域的な経験が形成されていくという因果関係を考えても存在の蓋然性が高いと考えられる。そこで本論では、筆者が2001年夏にモンゴル国スフバートル県オンゴン郡で行った調査データ⁽²⁾を中心に、過去に同地域で行った調査データ⁽³⁾及び比較用データとして2001年秋に中国内モンゴル自治区アバガ旗で行った調査データ⁽⁴⁾も使用しつつ、個人的経験としての自然災害に関するモンゴル牧民の言説を整理し、彼らの経験の特徴について考察したい。なお、特に着目した点は以下の通りである。

1. ホトアイルのレベル⁽⁵⁾での2001年冬季における被害状況
2. ホトアイルの変動および現状
3. 自然災害に対応する牧民の技術と牧畜戦略

● 調査データより

事例1：アムラー（オンゴン郡第3バグ，HN2⁽⁶⁾）

位置情報：N45°22′24.6″，E113°01′42.6″

10月20日ころ～3月か4月くらいまでゾドだったと認識しているが、被害

は少なかった。小家畜は前年末500頭，死亡0頭，現有800頭。ウシは前年末110頭，死亡7－8頭，現有130頭で，主に仔ウシが死亡した。ウマ・ラクダは無害だった^{m)}。

平年の冬営地はソムの南西40kmの地点（タバン＝トルゴイン＝エンゲリーン＝トイロム）だが，昨年冬は国境から5kmの地点（トゥイメルト）にいた。その後，ソムの南西50kmに位置する平年の春営地（バローン＝ハブツガイ）へ移動した。

調査年の夏営地については，ナーダムの前は「ツァガーン＝シャンド」の南側（97年と同じ），ナーダムの直前に郡中心地の西北6－7kmの「ボランギーン＝オルト＝デール」（事例2 ラマジャブの夏営地付近）に移動し，ナーダム後に現在の「ハルガイト＝ゴー＝バローン＝デール」（98年の夏営地の西側）へ移動した。理由は干ばつのため。6月24日から2～3日雨が降って，ナーダムの頃は草が良かったのだが，7月は暑くて全然雨が降らなかった。気温は35度くらいになった。

7月20日よりホットアイルを二つに分けた。アムラー自身は南側に住み，北500mの地点にバト（姉の夫）が住んでいる。水は北にあり，水のほうへ行った場合にはバトのところへ，南に行ったらアムラーのところにヒツジを泊まらせる。目的はヒツジを太らせるため。群れを分けているのではなく，人の住んでいる場所だけが別々になっている。

数日したら（調査日は8月12日），2－5km程度のオトルに出る予定。これは短距離のオトルなので，家族全員でゲルごと移動させる。行き先は，草の良い場所。2－3週間滞在する予定。その後もオトルを繰り返し，最終的には冬営地（タバン＝トルゴイン＝エンゲリーン＝トイロム）まで行くが，干ばつで冬営地の草が良くない場合には別のところへ行く。遠くても構わない。

事例2：ラマジャブ（オンゴン郡第3バグ，HN3）

位置情報：N45°25′43.0″，E113°01′48.1″

ゾドではウシは少し死んだが、他の畜種には被害はなかった。ウシは前年末200頭のうち、40頭が死亡。雪が降ったこともあるが、草の状況も良くなかったためにゾドになった。昨年冬営地は平年の場所（ボルダリン＝チョロー：夏営地の南西60km）だった。

現在の夏営地（ボランギーン＝ウンドゥル＝ドゥブ）にも草はないが、ほかに移動する場所もないと考えている。例年春季～秋季にかけてホトアイルを二分しており、調査当時息子2人は南西1km弱の場所で仔畜500頭、ラマジャブは成畜1000頭を放牧していた。

10月に秋営地へ移動するまではここに留まる予定だが、近くで雨が降ればそこへ移動する可能性もある。

事例3：チミッドダシ（オンゴン郡第3バグ，HN4）

位置情報：N45°28′52.9″，E113°01′39.3″（インフォーマントは弟ソゴル：N45°27′43.2″，E113°00′35.5″）

冬は西の国境沿い（ツァガーン＝デルスの北東，フジレー＝フル：事例5ゴンボ参照）に移動していたのでゾドの被害は小さかった。チミッドダシ所有分で仔ウシ1頭（現有数60頭），ソゴル所有分でウシ3頭（現有数40頭）と仔ヤギ2－3頭（現有数60頭）が死亡したのみ。

チミッドダシとソゴルは冬場は一緒に放牧しているが，3月からは家畜を太らせるために別々に放牧する。冬は1ホトアイル，そのほかの季節は2ホトアイルであると言うべきとのこと。このようなスタイルは結構多いという。

ソゴルの夏営地（デルセン＝ホダギイン＝ウンドゥル＝ドゥブ）では6月20日に雨が沢山降ったが，その後は降っていない。

事例4：ツェベグ（オンゴン郡第3バグ，HN5）

位置情報：N45°24′27.9″，E113°05′32.7″

冬営地（ツァガーン＝デルスニー＝バローン＝オルト＝ロー：郡中心地ハビルガの南西60キロ）では，旧正月の前に20cmの降雪があった。ゾドの被

害は以下の通り。ウシは前年末200頭のうち仔ウシを中心に22頭死亡、ヒツジは死亡なし（前年末700頭）、ヤギは前年末300頭のうち20頭死亡。

調査年度も6月に、1998年・1999年の調査時に夏営地を構えていたドゥルブン＝ホダグへ移動してきたが、6月に少し雨が降っただけで水が少ない。現在の夏営地の方が草の状態が多少良いので、ナーダム後（7月20日）こちらへ移動してきた。なお、去年の夏は湖（バダミン＝ノール：事例1アムラーの夏営地の北西）が大きかったのでそちらに夏営地と秋営地を構えた。

事例5：ゴンボ（オンゴン郡第3バグ，HN6）

位置情報：N45°18′02.3″，E113°00′13.2″

前年冬のゾドはひどかった。当時、夏営地（ドゥルブン＝ホダグ）の南西50kmの国境沿い（ツァガーン＝デルス）にいた。ここはゴンボがネグデル化以前に使っていた冬営地で、1990年以降、再び毎年冬営地を構えている。被害状況は、ウシが前年末140頭のうち20頭死亡、小家畜は前年末800頭のうち20－30頭死亡。いずれも仔畜が中心に死亡。土地が良いので死亡数は少ないという。

今年、ドゥルブン＝ホダグには干ばつのため4ホットアイルしかない。事例4のツェベグなど、半数のホットアイルが移動した。

トラクターを2年前の秋に購入し、季節移動の際に運搬用として使用している。しかし、飼料は売っていないので買わない。

事例6：ツォグゲレル（オンゴン郡第3バグ，HN7）

位置情報：N45°23′15.5″，E113°00′09.3″

1999年の夏には兄のバートルと2世帯でホットアイルを構成していたが、2001年5月にバートルがゴトブのホットアイルへ転出した。ホットアイルを分割した理由は、バートルが結婚して自分のゲルを持ったことと草の欠乏。ただし、前年の冬営地（フルストイ：後述のエールト＝ホショーの南東20km）ではジャンバという人物と一緒にいた。その後、ナーダムが過ぎてからエル

デネオチル（姉妹の夫）と一緒に、現在は2世帯でホトアイルを構成している。

ゴトブはツォグゲレル・バートルの父方平行イトコにあたり、調査当時4世帯でホトアイルを構成していた。彼らの夏营地（エールト＝ホショー）の位置情報は $N45^{\circ}12'11.8''$, $E112^{\circ}39'40.4''$ 。

ツォグゲレル兄弟のゾドの被害は以下の通り。ウシは前年末30頭のうち20頭死亡、小家畜は280頭のうち80頭死亡。ウシは自分では雪を掘れず、舌で草を巻きとって食べるだけなので、15–20cmの積雪でもゾドになるという。

ゾドで死亡したウシ・ヤギ・ヒツジは品質が悪く、儲けが出ないので皮を買い取ってもらえない。肉は食べる部分がないので、もちろん食べられない。

ゾドの援助品として、日本やドイツなどの外国からオンゴン郡にも小麦や米が来た。飼料は来なかった。ただし、所有家畜数100頭以下の貧しい世帯のみに渡したので援助品は受け取っていない。なお、飼料は政府が少しだけ売るが、せいぜい2–3日分くらいにしかない。しかも2000年の夏は干ばつだったので、干草の準備もできなかった。

2000年の夏にはドゥルブン＝ホダグにいた。今年と同程度の干ばつだった。今年の夏营地はドゥルブン＝ホダグから北へ10km離れているが、家畜の放牧はドゥルブン＝ホダグでも行っている。

事例7：オチルバト（オンゴン郡第1バゲ，HN8）

位置情報： $N45^{\circ}22'34.5''$, $E113^{\circ}12'53.5''$ （オトル先は $N45^{\circ}18'06.8''$, $E113^{\circ}07'39.4''$ ）

ゾドの被害状況はウシが前年末40頭のうち10頭死亡したのみ。前年末に600頭いた小家畜は被害を受けず、ウシに関しても20頭出生したので現在は50頭に増えている。なお、冬营地はオトル先（ゴビン＝ボル＝トルゴイ）の南東10kmほど（ゴルバン＝ホンゴル）と南7–8kmほど（フル）の2地点で、前半は前者に滞在し、後半は後者に滞在するのが例年の移動パターンとなっている。

アハラクチは調査日（8月16日）の2－3日前からオトル先に移動している。これは例年秋に行っているオトルであり、今後は息子をここより南3－4 kmに行かせ、そこにヒツジを連れて行き、そこでうまくいかなければ、また別のところにオチルバトが行き、そこにヒツジを連れて行く、というプロセスを繰り返す。

事例8：アビル（オンゴン郡第1バグ，HN9）

位置情報：N45°25′19.2″，E113°21′10.9″

例年および昨年冬営地（ハイルハン＝オール）は夏営地（イフボラギン＝ズーンシレー）の東5－6 kmの地点であり、ゾドの被害状況は以下の通り。ウシは前年末300頭のうち75頭死亡、小家畜は前年末1600頭のうち260頭死亡。なお、出生数はウシ45頭、ヒツジ385頭、ヤギ195頭であり、小家畜に関しては原状を回復している。

5月より牧夫を雇った。郡中心地に住んでいた20代の若者にアビル自身が依頼し、彼は妻と祖母を伴ってアビルのホットアイルに合流した。

事例9：ダムディン（オンゴン郡第1バグ，HN10）

位置情報：N45°24′56.1″，E113°24′24.2″

例年の冬営地はオラーン＝ホダグ（ソムの南西70km）にいるが、今年はオトルに出た。エルゲンという場所で、国境から500m。ここには国境警備隊の許可をもらって行った。普段は入れない場所。6ホットアイルが国境付近に行った。それぞれのホットアイルの間隔は3－4 km。

ゾドに関してはウシも被害に遭っていない。ただし、自然災害という意味ではショールガでウシを2－3頭失った。

秋はオトルに出る。調査（8月16日）の翌日もしくは明後日に調査地点の北東25kmの地点（ハル＝ゴビ，郡中心地より50km）へ移動予定だった。ダムディンと息子だけが小型のゲルとテント（マイハン）を持ち、ラクダ車で1日かけて移動し、15－20日くらい滞在する予定。

事例10：ツェンデー（オンゴン郡第1バグ，HN11：現在のアハラクチはバト
オルショー）

位置情報：N45°24′17.8″，E113°19′04.2″

ツェンデーはネグデル時代には牧民ではなかったため家畜が少なく，2000年夏よりバトオルショーのホットマイルに合流している。また，自然災害に関する情報も全てバトオルショーによる。

昨年冬はゾドだったので，ホンゴリン＝シャル＝ホーライという20km南西の平原に行き，冬営地を構えた。ウシは夏営地（イフ＝ボラギン＝フル）の南側数km，以前ツェンデーが放牧していた場所（フルデン＝デルス）に連れていき，ツェンデーはこちら側にいた。

ゾドの被害状況は以下の通り。ウシは前年末20頭のうち9頭死亡，小家畜は前年末412頭のうち30頭死亡。なお出生数はウシ9頭，ヒツジ103頭，ヤギ65頭だった。

事例11：ボルガリド（オンゴン郡第1バグ，HN12）

位置情報：N45°06′48.4″，E113°08′59.7″（ボルガリドの滞在していた春営地）

昨年の冬営地は例年通りの場所（トホイ：N45°08′28.8″，E113°09′55.0″）だったが，ゾドとショールガの被害を受けた。ウシは前年末370頭のうちゾドで100頭が死亡，内訳は仔ウシ110頭のうち10頭のみ生存という状況だった。ほかに12月31日のショールガで60－70頭失った。強風にあおられ，国境の方へ行ってしまい，国境の向こうへ行ってしまったのもいるし，死んでしまったのもいる。小家畜は前年末1800頭のうち，300頭が死亡した。ただし，現在の小家畜頭数は1800頭で原状を回復している。なお，降雪は1997年より少なく，ゾドとなったのは草が少ないのが原因。

調査当時，畜群は息子の滞在している夏営地（エベル＝オボーニィ＝ズーン＝ドル：N45°18′54.0″，E113°16′07.8″）に1000頭，娘婿の滞在している夏営地（ツァガンノール：N45°21′34.8″，E113°17′28.0″）に800頭と分散

している。とにかくヒツジが多いので、1箇所の牧地では水が足りなくなる。そうすると家畜が太らないため、対策としてこのような放牧方法を採用している。

ボルガリドは定住している親戚の家畜を合計140-150頭預かっている。ラクダ以外の全ての種類。皆、彼の放牧技術を信頼して預託している。

事例12：バター（オンゴン郡第2バグ，HN13）

位置情報：N45°57′13.1″，E113°16′56.1″

調査時、アハラクチは所用で一家そろってダリガンガへ行っていたため、ホトアイルを構成している妻の姉の夫が可能な範囲で回答した。

冬営地（ワンチギーン＝トホイ）は夏営地（バローンサラ）の北10kmで、ハルザン郡の領域内。昨年冬もここで冬営地を構えたが、ゾドと年末のショールガの被害に遭った。ウシは前年末160頭のうち50頭が行方不明になった。ただし、ゾドでの死亡は少数で、現在の頭数は130頭。小家畜はゾドで50-60頭死亡し、現在の頭数はヒツジ300頭、ヤギ100頭となっている。

事例13：ドラムラクチャー（オンゴン郡第2バグ，HN14）

位置情報：N45°46′23.0″，E113°00′41.4″

冬営地（フルズント）は夏営地（ソブラガン＝オハー）の西14km、沙漠の中にある。通年で畜群を母子群と去勢・不妊群に分けており、本人が前者を、息子（夏営地はN45°43′01.8″，E113°04′00.0″）が後者を放牧しており、冬営地に関してはそれぞれが家畜囲いを有している。ゾドの被害はウシが前年末180頭のうち70頭死亡したのみ。なお、ウシは春に30頭出生し、小家畜は前年末1300頭で春に400頭出生した。

調査年度は秋営地（エルスニー＝ズーン＝ハヤー：夏営地の西5km）に入らず、オトルに出る予定。10km北西のフルステイという場所で。近くを転々としながら、11-12月に冬営地に入る。こうしたオトルをオイリン＝オトルといい、70-150km移動するホリン＝オトルとは区別される。

事例14：ダワクチャー（オンゴン郡第2バグ，HN15）

位置情報：N45°56′00.3″，E113°06′26.0″

旧正月の後，春営地（ピント：夏営地と同一地点）に入った。この辺りはゾドがひどかった。冬営地（ピント）は夏営地（ピント）の北2－3 kmで，通年でほとんど移動しない。営地の地名は全て「ピント」であり，それぞれ2－3 kmの距離しか離れていない。

ゾドの被害状況は以下の通り。ウシは前年末80頭のうち60頭死亡，ヤギは前年末200頭のうち60頭死亡，ヒツジは前年末90頭のうち20－30頭死亡。

調査地点から北西8 kmのところに最近雹が降り，大小たくさんの湖ができたので，近々オトルに出る予定。

事例15：ガントゥムル（オンゴン郡第2バグ，HN16）

位置情報：N45°50′03.2″，E113°14′24.2″

冬営地（ズーン＝トゴー）は調査地（ボンボン＝セトレフ）の南西15 kmで，今年も冬には同じ場所へ行く予定。冬営地は水がないので秋のオトルの後，雪が降り次第移動する。一方，昨春は例年と異なり，冬営地の西3 kmの地点（バロートゴー）に春営地を構えた。選定理由は草の状態が良く，石の家畜囲い（ネグデル時代のラクダの囲いが放棄された残骸）や井戸が存在するため。

自然災害の被害状況は以下の通り。ウシは前年末110頭だったが，ゾドで50頭死亡，ショールガで20頭失い，現在の頭数は40頭。小家畜は前年末970頭のうちゾドでヒツジ100頭，ヤギ30頭が死亡，現在はヒツジ900頭，ヤギ150頭。

事例16：アルタンゲレル（オンゴン郡第2バグ，HN17）

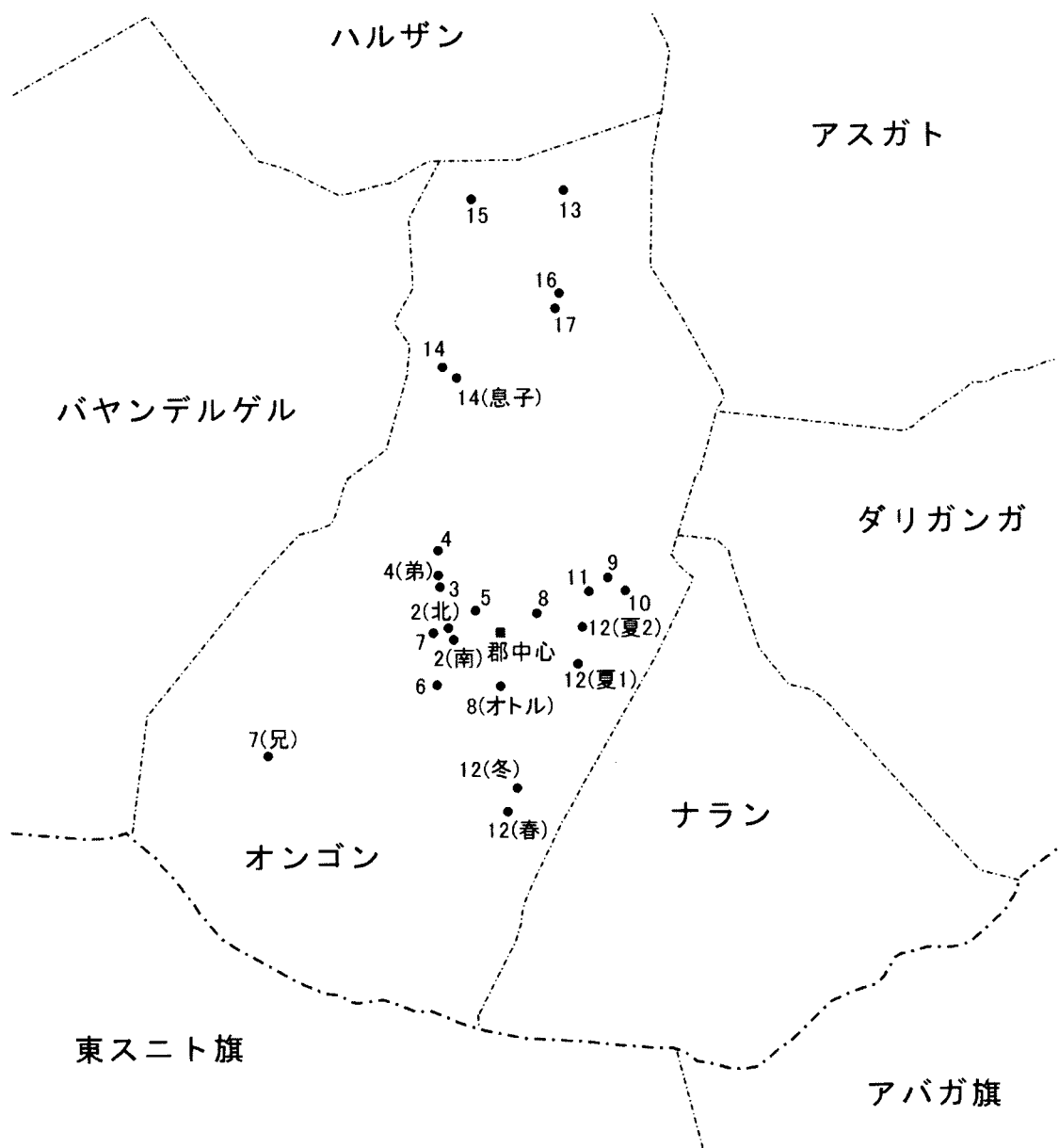
位置情報：N45°48′51.9″，E113°13′43.8″

ここ（ボンボン＝セトレフ）では干ばつはひどくない。秋営地はセトレフ（東3－4 km），冬営地はズーン＝ソーリン＝アルト（南10 km），春営地はハ

ルタリン=ホダグ（西）。

自然災害の被害状況は以下の通り。ウシは前年末90頭のうちゾドとショールガで40頭死亡，現在は60頭。小家畜は前年末400頭（ヒツジ300頭，ヤギ100頭）のうちゾドで50-60頭死亡，現在は600頭。

去年9月に婿の世帯が加入してホットアイルが3世帯になった。もともと1人しか息子がおらず，労働力が不足するために来てもらった。



図：オンゴン郡のインフォーマント分布図

表：オンゴン郡における2000年冬～春の被害状況

HN	所属 バグ	世帯 の数	ウシ 年末数	ウシ 被害数	小家畜 年末数	小家畜 被害数	備考 (表中*の説明等)
2	3	2	110	8	500	0	
3	3	2	200	40	(1500)	0	
4	3	4	100	4	(860)	2-3	
5	3	2	200	22	1000	20	ヤギのみ死亡
6	3	5	140	20	800	20-30	
7	3	3	30	20	280	80	兄弟分のみ
8	1	2	40	10	600	0	
9	1	4	300	75	1600	260	
10	1	2	150	2-3*	960	0	シヨールガによる
11	1	3	20	9	412	30	
12	1	5	370	100+70*	1800	300	シヨールガによる
13	2	2	160	50*	(400)	50-60	シヨールガによる
14	2	2	180	70	1300	0	
15	2	2	80	60	290	80-90	
16	2	1	110	50+20*	970	130	シヨールガによる
17	2	3	90	40*	400	50-60	シヨールガ含む

小家畜年末数の欄におけるカッコつき数字は調査時点の現有数を示す

比較事例1：ビリグト（アバガ旗ボグドオーラ郡サロールタル＝ガチャ）

位置情報：N44°02′59.4″， E114°14′47.9″

調査地点は春営地。夏営地は南のほうにあるが、今年は干ばつで草が悪いので行っていない。現有家畜頭数は小家畜400頭、ウシ30頭。小家畜は年間300頭出生する。現在はヒツジの比率が高いが、ヤギを増やしていく意思がある。冬営地には井戸がなく、ウシは水が少ないと大変なので減らした。土地は四季分あわせて8000ムー（5.3平方キロ）で、冬営地以外の営地には井戸がある。

家畜囲いの北側には大量の砂が溜まっているが、これは春以降に吹き寄せてきたもの。調査年度は特にひどいとのことであった。

ビリグトの世帯ではウルム・ツァガーのような乳製品を製造しているが、調査年度は干ばつだったのでかなり珍しい事例である。

比較事例2：ムンフオチル（アバガ旗ボグドオーラ郡サロールタル＝ガチャ）

位置情報：N43°59′26.2″，E114°14′19.2″

調査地点は夏営地。比較事例1ビリグトの夏営地はこのすぐ北にある。現有家畜数はヒツジ400頭，ヤギ120頭。ほかに，西スニトにいる弟のヒツジ140頭を預かっている。そのうち，冬に残すのは300頭のみ。ほかは売却しないと草が不足する。特に，この2年はゾドだったので草不足が顕著。ウシ16頭，ウマ15頭も所有しており，春営地に留めてある。かなりの数をすでに売却。ウシは肉用，ウマは日常的には乗らない。

ウシはここ2年，搾乳していない。草の状態が悪いので春営地に留めてある。茶を飲む際には粉乳を使用し，来客に出す乳製品も買ったもの。

牧民は衛星放送のテレビで天気予報を見ている。風の予報も見られるので，予測と準備ができるために被害は小さい。シヨールガの時には家畜を外に出せない，春には自分の手を伸ばした先が見えないほどのひどさになる。

29日から（調査日は24日），南の3000ムー（2平方キロ）の土地にオトルに出す。親しい知り合いの土地で，1群1ヶ月600元支払う。オトルに出向くのは四子王旗から単身で来ている牧夫。彼は1ヶ月前から雇用している。四子王は干ばつがひどいという。

比較事例3：シヨロー（アバガ旗ボグドオーラ郡サロールタル＝ガチャ）

位置情報：N44°03′50.6″，E114°14′49.1″

調査地は春営地，比較事例1ビリグトの土地に隣接している。一度夏営地へ行ったが，草が悪いので戻ってきた。春営地のほうがまだ草の状態が良いとのこと。ここには4世帯で住んでいるが，うち1世帯は現地出身の牧夫，それ以外の3世帯は親族。現有家畜数は小家畜300頭，ウシ20頭，ウマは親族の3世帯合計で20頭。

この一帯も、雨が降れば池ができる。また、雪も降り、前年冬には50cmくらい積もった。雪が降ったらバイクは無理なので、ウマに乗る。ラクダがいればラクダにも乗るが、今は少なくなった。

ショローは冬用の干草の値段が高くなるという見通しを持っていた。噂では、東ウジュムチン旗は干草を域外へ出さなくなったという。

補足：内モンゴルの調査地一帯に関する概況

アバガ旗ボグドオーラ郡における牧地の分配状況は、四季に対応した4箇所
の牧地を世帯ごとに割り当てられるシステムであった。なお、夏営地を除
けば牧地の有刺鉄線による囲い込みはほぼ終了している模様である。

調査当時、シリングル盟西部からウランチャブ盟にかけて干ばつがひどく、
アバガも前述の地域ほど重大ではないにせよ干ばつに見舞われていた。牧民
によってはウジュムチンにオトルに出しているとの伝聞情報もあった。政府
の命令でウジュムチンの牧民には承諾させ、オトルに入る牧民は1頭1ヶ月
いくら、という金を払っているとのことであった。

2001年1月1日にショールガの吹雪になって東ウジュムチン旗で5-6人、
西ウジュムチン旗でも同じくらいの死者が出た。彼らは視界不良のために家
が見つからず凍死した。シリン хот市でも死者1名とのことであった。

● おわりに

オンゴン郡の調査データより顕著に見出せるのは、まず第一にバグごとの地
域差である。第3バグの牧民は例年南西の国境近くで越冬するが、そこでも20
cm近い積雪があったといい、場合によってはさらに国境方面へ移動するなど
して難を逃れようとしている。第1バグでも個人的ネットワークを駆使して国
境方面へ移動した事例9や2箇所の冬営地を利用する事例7など、避難行動を
行った牧民は比較的無事に過ごしているように見受けられる。なお、彼らにと
つてのゾドとは単に大量の積雪を意味しておらず、むしろ積雪をきっかけとする
草の欠乏が決定的な要素になっていると認識されている点は示唆的である。つ

まり、ゾドを「雪害」と訳すことで「大雪」と解釈してしまうような理解のあり方の誤謬を明らかにしてくれるのである。ただしゾドで大きな被害を受け家畜が激減し、結果として別の人物に依存する形で兄がホトアイルから出て行った事例7において、ホトアイルの変動要因を草の不足に帰している事例もあるため、彼らの「草の語り」については、今後さらに詳細な検討が必要であろう。

一方、第2バグに関しては平年の移動距離も少ないが、ゾドがひどかったと認識されている2000年冬季においても目立った避難行動は見られず、そしてウシを中心に最も大きな被害を出している。ウシの被害に関する限り、優秀牧民の誉れ高い事例13⁽⁸⁾も4割を失い、道路沿いの井戸からほとんど移動しない事例14では7割以上を失うなどいずれも甚大であるが、小家畜の被害に関しては顕著な差がある。この背景には、単に広範囲に同程度の積雪があったために取って移動しなかったという事情のみならず、オンゴン郡で現在唯一小家畜の搾乳を行う第2バグには小家畜優先の価値観が存在する可能性もあろう。ただし、ウシのほうで圧倒的に頭数の回復力が小さいことは第1バグの事例などで明らかなので、これだけの傍証で結論を出すことは危険であることも事実である。

なお、バグを越えた共通性を見出すとすれば、最も顕著なのはゾドやショールガの被害がウシ中心であるということだろう。ショールガに関してはウシが特に弱い説得的な理由が見出せないが、ゾドに関しては事例6の言説に表れているようにウシの食草方法に起因するものであるため、地方差が存在し得ないのである。ただし、ウシはネグデル時代を通じて増殖が図られてきたという経緯があるため⁽⁹⁾、その意味では政策によって引き起こされた災害という側面も持っている。また、事例13以外に、事例1や事例11、事例15などが腕の良い牧民との評判が高いが、事例1のようにほとんど無害で越冬できているケースから事例11のように多くのウシを失っている事例までのバリエーションが存在することから、自然災害に関しては単に牧民の勤勉さや技術を超えた「運」という要素が小さくないことが伺える。

さらに、牧民を悩ませる問題はゾドに限らないことも彼らの言説から明らかになる。2001年の、夏から秋にかけての問題は干ばつであった。無論、彼らの

認識では干ばつはゾドの遠因となるのだが、ホトアイルの分割やオトルによって水と草を確保しようとする彼らの牧畜戦略は、特に南の第1・第3バグで顕著であった。この点は、南のほうが降水量が少ないオンゴン郡の地的事情と関連するものと思われる。

この干ばつの問題は、さらに南に位置するアバガ旗の比較事例においてより重大となる。アバガ旗では、夏営地から引き上げ、ウシの搾乳を控え、さらに越冬頭数も減少させるほど干ばつの影響が存在し、まさに干害と呼びうる状況にある。アバガ旗の牧民は天気予報という情報手段を有している点や牧地分割により畜群の移動に制限が加えられている点、冬用の飼料として干草を利用可能である点など、オンゴン郡の牧民とは社会環境が異なる。その一方で乾燥や大風など、自然環境では類似点が多く、とくに後者に関しては風が吹いた日付までほぼ同一であるほどの一致を見る。これは個人レベルでの災害経験において、社会環境がより重要なファクターであることを示しているといえる。

最後に、国家的経験としてのゾドにおいては中心的なテーマたり得た国際援助についてであるが、オンゴン郡においては他地域より被害規模が小さかったせいか、あるいは筆者の調査ホトアイルに比較的裕福な牧民が多かったせいか、もっとも状況が悪いと思われる事例6において言及があったのみで、しかも彼ら自身は援助品を得られるラインよりわずかながら裕福であったがゆえに、結局誰1人として援助とは無関係であった。こうした事実から、一般にゾドと総称される事象が経験主体の差によって多様な様相を示しうるという当初の作業仮説が、少なくとも国家と個人のレベルにおいては正しいという結論が導き得るだろう。そして、そうした経験主体がどのレベルに設定しうるのかをモンゴル社会について実証的に研究することが今後の課題となる。

註

- (1) 外務省ホームページに掲載された情報によれば、1999年から2000年の冬期、及び2000年から2001年にかけての冬期の2回にわたり、雪害（ゾド）が発生した。このため1年目の雪害で家畜約225万頭、2年目には約350万頭が斃死し、多数の牧民とモンゴル経済に大きな打撃を与えたという（外務省ホームページ「最近のモンゴル情勢と

日・モンゴル関係」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/kankei.html>, 2002年10月31日閲覧)

- (2) 本調査は、2001年8月10日より8月19日までオンゴン郡で行った。
- (3) 2001年以前の調査については(尾崎 1999; 尾崎 2001)を参照されたい。
- (4) 本調査は、2001年8月24日より8月30日までアバガ旗北部で行った。なお、調査の詳細については(尾崎 近刊)を参照されたい。
- (5) 聞き取り対象者はホトアイルの代表者であるアハラクチであるが、彼らは全ホトアイルの牧畜に関する決定権を有しているため、ホトアイルのレベルでのデータと個人的経験というテーマ設定は矛盾するものではない。
- (6) オンゴン郡の事例におけるHNnという世帯番号は(尾崎 2001)における事例番号に対応している。
- (7) 今回の調査でウマ・ラクダに対する災害の事例は存在しなかったため、以下の事例ではウマ・ラクダに対する言及は省略した。
- (8) 彼は「ミャンガン＝マルタイ(家畜を1000頭所有する)」の牧民として1999年に農牧大臣より表彰状を得ている。
- (9) 1998年8月にオンゴン郡で行った調査の際、案内人のダシザブ氏がネグデル時代にヒツジを搾乳しなくなった理由の1つとして、労働が面倒な上に現在はウシで十分乳が足りるようになってきていると筆者に述べた。これは、ネグデル時代にオンゴン郡でウシが増加したことの傍証となるだろう。

参考文献

- 尾崎孝宏 1999 「『現代モンゴル牧民社会の基層的単位に関する研究——スフバートル県オンゴン郡の事例』調査報告」『日本モンゴル学会紀要』29:61-78。
- 2001 「モンゴル牧民の移動ルート選定の安定性——モンゴル国スフバートル県の事例——」『鹿大史学』48:1-28。
- 近刊 「内モンゴル牧民に関する『遊牧』論的比較考察」『鹿大史学』50(印刷中)。